

## 阪口豊先生を送る言葉

米倉伸之（地理学教室）

私が本郷に進学してきたのは昭和35年（1960年）4月のことでしたから、もう30年も昔のことです。当時の地理学教室は一講座で、多田文男教授、佐藤久助教授、吉川虎雄助教授、小堀巖講師、岩塚守公助手、阪口豊助手という方々が教官でした。阪口先生は最も若い教官として、潑刺として研究に取り組み、学生実習を担当されていたことを、つい昨日のことのようによく覚えています。学部3年生の時に進級論文のフィールドとしてえらばれた大磯丘陵から酒匂川平野へ、私達を連れていってくれたのも阪口先生でした。それから30年という歳月が瞬く間に過ぎてしまい、私が進学していた当時の先生方は次々と定年を迎えられて教室を去られ、当時最も若かった阪口先生をお送りする年になってしまいました。

私が地理学教室に進学した当時から、阪口先生は年齢が最も若かったためでしょうか、学問に対する厳しさでは並み居る先生方のなかで誰にも敗けないものを学生に感じさせておられました。外国からの新着雑誌には、教室で一番最初に眼を通しておられました。教室のゼミナルで私たちに質問やコメントをされる時には、正確な知識と勉強に対する真面目な態度を厳しく求めておられました。準備が不十分で手抜きをした学生には時として大声も出されて、私たちの姿勢を正されま

した。また冬の寒さの厳しい時も、夜遅くまで研究室で外国の厚い書籍を読んでおられた姿などをよく拝見いたしました。

阪口先生は私達が研究テーマやフィールドを決める時や、研究の進め方を模索している時に、あしなさい、こうしなさい、とは決しておっしゃいませんでした。「自分でよく考えなさい」の一言でした。これは地理学教室のよき伝統でもあります。自由に研究できることの大切さと研究の厳しさを同時に私たちと教えてくださいました。私達は阪口先生の毎年のように重要なテーマについて次々と論文や著書を書かれている姿をみてきました。阪口先生が学問を楽しまれている姿をみて、自分たちの不勉強を反省する毎日でした。

阪口先生は博士論文で「北日本における泥炭地の古地理学的研究」（英文、1961）を書かれて以来、花粉分析を主な研究方法とされて、最終氷期から後氷期にかけての日本列島の古地理・古植生・古気候の復元を研究の中心に据えてこられ、この分野における第一人者であります。さらに泥炭地に秘められた環境変化をいかに繙くかということを中心として、日本および世界各地の泥炭地の研究を「泥炭地の地学—環境の変化を探る—」（1974、東京大学出版会）としてまとめられました。また尾瀬ヶ原は先生の長年にわたる研究の中

心的なフィールドで、尾瀬ヶ原の共同調査の世話役もされ、その研究の成果は「尾瀬ヶ原の自然史」(1989, 中公新書)として最近刊行されました。

さらに北海道は泥炭地の宝庫であると同時に、先生の好きなフィールドでもあり、サロベツ原野の泥炭地の研究だけでなく、北海道の大地形・海岸段丘・地殻変動についての総括的な研究は、北海道の地形を語る時に忘れることの出来ない重要な仕事です。大学院生時代の1956年にはイラク・イラン遺跡調査団に参加され、その後も西アジア洪積世人類遺跡調査団に同行するなど、合わせて3回にわたり西アジア各地を広く歩かれ、乾燥地域における自然地理と地形発達について研究されました。また1968年～69年にかけては、文部省在外研究員としてウィーン(オーストリア)に滞在され、その時の研究成果は「ウィーンと東アルプス」(1973, 古今書院)やヨーロッパ・アルプスの地形論文として発表されています。また「日本の自

然」(1980, 岩波書店)や「氷河時代」(1982, 小林国夫さんとの共著, 岩波書店)の編著者でもあり、地理学界のみならず、周辺の学界でも有数の博学ぶりです。理学部地理学教室では「自然地域学」「陸水学」を、人類学教室では「第四紀学」を、文学部では「地学概論」を長年にわたり講義され、その博識と熱弁ぶりは卒業生の語り種になっております。

正に研究と教育の両面にわたり、決して手を抜かず全力を注がれてこられました。不勉強な私ども後輩を尻目に、いつも学問の最前線を走り続けてこられました。その姿こそ、研究者として教育者として、私たちの良きお手本であります。昨年の初夏には大学院の学生と一緒に尾瀬ヶ原に出掛けられ、残雪の山に登られるほどの若さです。これからもお元気で、学問の道を自由に楽しまれ、いつまでも私たちの前を歩き続けて下さるようお願いして、先生を送る言葉といたします。